高知女子大学看護学会誌　VOL.47, NO. 2, pp63～75　2022

研究報告

乳児期の子どもを育てる父親のMastery
―属性との関連―

Mastery of Fathers Rearing Infants
―Exploring for related attributes―

嶋　岡　暢　希（Nobuki Shimaoka）*1　　中　野　綾　美（Ayami Nakano）*1

要　　約

本研究では乳児期の子どもを育てる父親のMasteryとMasteryに関連する属性を明らかにし、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryを促進する看護について示唆を得ることを目的とした。乳児期の子どもを育てる親のMastery質問紙等からなる調査用紙を配布し、97名の父親からの回答を分析対象とした。乳児期の子どもを育てる父親のMasteryの記述統計と、属性によるｔ検定、もしくは一元配置分散分析による検定を行った。その結果、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryは職業、健康状態と関連していること、子どもの人数、月齢、栄養、離乳食開始、子育ての主体で有意差があった。

これらの結果から、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryは職業の有無や健康状態、子どもの人数、月齢、栄養、離乳食開始、子育ての主体に関連しており、乳児の月齢や栄養方法によって【育児スキルの向上】、【親としての自立】が高められること、子どもの人数が増えることにより、父親の時間的・心理的ゆとりのなさが一因となり、【生活と育児の調和】、【親役割の受け入れ】、【親としての自制】を低下させていることが推測された。父親が仕事を持ちながらも母親とともに子育てに責任をもって関与することがMasteryを高めるために重要であることが示唆された。

キーワード：育児　乳児　父親　Mastery

Ⅰ．は　じ　め　に

家族形成期における夫婦は、夫婦としての相互理解を深め、日常生活の基盤を確立し、夫婦の絆を深めていくという課題、子どもが誕生すれば夫婦間で新しく担う親としての役割を分担し、子どもへの責任を遂行し養育するという家族の発達課題を遂げる段階にある。しかし日本では未だ育児全般を女性が中心となって担っており、令和２年の育児休業取得率では女性81.6％、男性12.65％、平均の育児休業取得期間では女性の９割が６か月以上の一方、父親の８割が１か月未満（厚生労働省，2021）と、父親が母親と協働して育児を担うには厳しい実情がある。

神谷は「親役割とは本来、『子ども』という地位と相互的な関係をなす『親』という地位に期待される行動様式であり、定義そのものは親の性別を含意した概念ではない」と述べており（神谷，2008）、育児経験により親は性別を問わず発達・成長する（柏木ら，1994）ことも明らかになっている。そこで、本研究ではストレスの経験を通して適応能、統制能、支配能を獲得していく人間の反応であるMastery（Younger, 1991）に着目し、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryとMasteryに関連する属性を明らかにしようと考えた。このことから乳児期の子どもを育てる親が夫婦で協力して育児の課題を乗り越え、ともに発達を遂げるための看護を検討する一助としたい。

*1 高知県立大学看護学部看護学科

Ⅱ．研　究　目　的

乳児期の子どもを育てる父親のMasteryとMasteryに関連する属性を明らかにすることで、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryを促進する看護について示唆を得る。

Ⅲ．本研究の枠組み

文献検討と予備調査から乳児期の子どもを育てる親のMasteryに関する42項目の質問紙を作成した。I-T相関、因子分析を経て、乳児期の子どもを育てる親のMasteryは38項目９つの要素から構成されると考えた（嶋岡ら，2020）。乳児期の子どもを育てる親のMasteryと構成要素の定義は表１に示す（以下、【　】は構成要素を示す）。尺度は４段階のリッカートスケールで、４：非常にそうである、３：ややそうである、２：あまりそうでない、１：全くそうでないとした。

乳児期の子どもを育てる親のMasteryに関連する属性として年齢、就労、職業、健康状態、家族形態、子どもの人数、乳児の月齢、出生体重、乳児の健康問題、栄養方法、離乳食の開始、子育ての主体、家事の主体をあげた。

Ⅳ．研　究　方　法

１．研究デザイン

本研究は量的記述的研究デザインである。

２．データ収集

研究協力が得られた自治体や医療施設で行われる母子保健事業や健診の参加者、もしくは地域の子育て支援センター来所者で、乳児を育てる親とした。データ収集は2018年１月～2018年７月に行った。調査用紙の配布は研究者もしくは、健診等の担当者から対象者に研究の主旨を説明し配布する方法とした。回答は郵送法により回収した。

３．分析方法

統計ソフトSPSS Statistics Ver. 25を使用し、基本統計量、ｔ検定、一元配置分散分析を行った。有意水準は$p<0.05$ (*) および$p<0.01$ (**) とした。

４．倫理的配慮

高知県立大学研究倫理委員会での承認を得た（看研倫17-50）。

表１　乳児期の子どもを育てる親のMastery

定義：親が子どもの誕生に伴う新たな課題に対し育児スキルを向上させ、豊かな方略を活用し親として自立すること、自己と状況の理解により親としての自制を働かせ、時には目標を現実的に調整し、ゆとりの確保をはかりながら、生活と育児の調和、親役割の受け入れ、自分らしさの変容に至ること	
構成要素	定　　義
【生活と育児の調和】	工夫や努力を重ね、生活と育児が調和し、適応に至ること
【自分らしさの変容】	これまでの自分らしさを変容させ、新たな力をもった自己として再統合すること
【育児スキルの向上】	自分の子どもにあわせた育児スキルを習得し、そのスキルを効果的に活用する能力をもつこと
【親役割の受け入れ】	親としての役割を自分のこととしてとらえ、おかれた状況に肯定的な意味付けや楽観的感情が生じる状態であり、親としての成長・発達につながること
【親としての自制】	自分を制し、自分に生じる感情や子どもがおかれた状況に向き合い理解することで対処を見出し、育児のストレスを克服すること
【豊かな方略】	問題解決に向けて責任をもち、自分自身で多様な知識やスキルから選択された行動を起こし、問題解決につなげること
【現実的な調整】	現状を客観的にとらえ、目標を再設定することで、自分がコントロール可能な状況を創っていくことや、現実と自己との関係を再調整し受け入れていくこと
【ゆとりの確保】	休息や自由な時間によるくつろぎや、家族との方針の共有から生じる身体的心理的なゆとりにより、ストレスへの対処力を高めMasteryに至る力となること、またMasteryに至ることでさらにゆとりが生まれること
【親としての自立】	周囲の支援を受けながら、あるいは大変な状況でも自分が主体となって決定、行動し、親としての課題に主体的に関与すること

Ⅴ．結　　果

１．質問紙の回収結果

11の市町村、５か所の子育て支援センターに協力を得て質問紙907部を配布した。その結果、180家族、282部の返送があり（回収率19.8％）、子どもの月齢が１歳を過ぎているものや、欠損値があるものを除き、157家族、246部の回答が得られ（有効回答率87.2％）、そのうち父親の回答は97部であった。

表２　対象者の属性一覧（$n=97$）

属性		人数
年齢	35歳未満	43名（44.3％）
	35歳以上	54名（55.7％）
就労	有	92名（94.8％）
	無：フルタイム育休中	2名（ 5.2％）
	無：	3名（ 3.1％）
職業	有：フルタイム	92名（94.8％）
	有：フルタイム育休中	2名（ 2.1％）
	無	3名（ 3.1％）
健康状態	健康	92名（94.8％）
	どちらでもない	4名（ 4.1％）
	不健康	1名（ 1.0％）
家族形態	核家族	91名（93.8％）
	複合家族	6名（ 6.2％）
子どもの人数	１人	65名（67.0％）
	２人	27名（27.8％）
	３人以上	5名（ 5.2％）
乳児月齢	１～３か月	30名（30.9％）
	４～６か月	28名（28.9％）
	７～11か月	38名（39.2％）
	無回答	1名（ 1.0％）
乳児出生体重	2,500g以上	87名（89.7％）
	2,500g未満	10名（10.3％）
乳児健康問題	無	88名（90.7％）
	有	9名（ 9.3％）
栄養	母乳，母乳と離乳食	56名（57.7％）
	人工乳，人工乳と離乳食	14名（14.4％）
	混合，混合と離乳食	26名（26.8％）
	離乳食	1名（ 1.0％）
離乳食	開始	38名（39.2％）
	未開始	59名（60.8％）
子育て主体	夫妻	5名（ 5.2％）
	妻	92名（94.8％）
家事の主体	夫妻	17名（17.5％）
	妻	77名（79.4％）
	その他	3名（ 3.1％）

２．対象者の概要

対象者の平均年齢は34.9歳（*SD*6.56）、範囲は23歳から54歳であった。対象者の属性一覧を表２に示した。

３．乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと属性との関連

１）乳児期の子どもを育てる父親のMastery得点

対象者全体の総得点平均値、各構成要素得点平均値、１項目あたりの平均値（各構成要素得点平均値を項目数で割った値）、獲得率（満点を100とした平均値の割合）を算出した。Mastery総得点は111～120点の範囲に最も多く分布し、平均値は116.11（*SD*14.12）、獲得率は76.39％であった（表３）。

２）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと属性

属性により平均値を比較したところ、職業、健康状態、子どもの人数、月齢、栄養、離乳食開始、子育ての主体でMastery総得点と複数の構成要素で有意差があった。

(1)　職業の有無

対象を職業有り（フルタイム、フルタイムで育休中）、職業無しに分けてｔ検定を行った。Mastery総得点（$p=0.028^{*}$）、【親としての自制】

表３　乳児期の子どもを育てる親のMastery得点の概要（$n=97$）

	項目数	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値/項目数	獲得率
Mastery	38	116.11	14.12	87	152	3.06	76.39
生活と育児の調和	5	14.39	2.44	9	20	2.88	71.96
自分らしさの変容	6	18.22	2.91	10	24	3.04	75.90
育児スキルの向上	4	12.04	2.13	4	16	3.01	75.26
親役割の受け入れ	7	23.74	2.96	13	28	3.39	84.79
親としての自制	4	11.84	1.92	7	16	2.96	73.97
豊かな方略	4	12.32	1.90	6	16	3.08	77.00
現実的な調整	2	5.93	1.09	3	8	2.96	74.10
ゆとりの確保	3	8.47	1.62	4	12	2.82	70.62
親としての自立	3	9.16	1.51	6	12	3.05	76.37

（$p=0.047^{*}$）で有意差があり、全ての項目で職業無しの平均値が高かった（表４）。

⑵　**健康状態**

対象を「健康である」と回答した者と、それ以外（「どちらともいえない」、「健康でない」）の回答をした者の２グループに分けてｔ検定を行った。「健康である」と回答した者のほうが、それ以外の回答者よりMasteryと全ての構成要素の平均値が高かった。【現実的な調整】（$p=0.005^{**}$）で有意差がみられた（表５）。

⑶　**子どもの人数**

子どもの人数を１人、２人、３人以上のグループに分け、一元配置分散分析を行った。

Mastery、【生活と育児の調和】、【自分らしさの変容】、【親役割の受け入れ】、【親としての自制】、【豊かな方略】、【現実的な調整】、【親としての自立】で、子ども３人以上が最も低かった。この中で有意差があったのは【生活と育児の調和】（$p=0.043^{*}$）、【親役割の受け入れ】（$p=0.005^{**}$）、【親としての自制】（$p=0.005^{**}$）であり、多重比較ではいずれも子ども１人と３人以上間で有意差があった（【生活と育児の調和】（$p=0.033^{*}$）、【親役割の受け入れ】（$p=0.003^{**}$）、【親としての自制】（$p=0.003^{**}$））。【育児スキルの向上】は最も低いのが子ども２人であったが、有意差はなかった（表６）。

⑷　**乳児月齢**

子どもの月齢を１～３か月、４～６か月、７～11か月の３グループに分け、分析した。Mastery、【生活と育児の調和】、【自分らしさの変容】、【育児スキルの向上】、【親役割の受け入れ】で７～11か月が最も高く、次いで１～３か月、最も低いのが４～６か月であったが、【育児スキルの向上】のみで有意差がみられ（$p=0.034^{*}$）、多重比較では７～11か月が４～６か月より有意に高かった（$p=0.034^{*}$）。【親としての自制】は月齢が高いグループほど低くなり、【豊かな方略】、【親としての自立】では１～３か月が最も高く、次いで７～11か月、４～６か月が最も低かったが、有意差はなかった。【現実的な調整】、【ゆとりの確保】は月齢が高いグループほど高くなったが有意差はなかった（表７）。

⑸　**栄　養**

母乳栄養、人工栄養、混合栄養に分けて一元配置分散分析を行った。なお、それぞれに離乳食を開始している場合も含めた。Masteryでは人

表４　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと職業との関連
上段：職業有り（$n=94$）、下段：職業無し（$n=3$）

	平均値	標準偏差	F値	有意確率	t値	df	有意確率
Mastery	115.55	13.76	0.023	0.880	-2.232	95	0.028*
	133.67	17.01					
生活と育児の調和	14.32	2.41	0.151	0.699	-1.656	95	0.101
	16.67	2.89					
自分らしさの変容	18.12	2.88	0.156	0.694	-1.911	95	0.059
	21.33	2.52					
育児スキルの向上	11.97	2.10	0.001	0.974	-1.924	95	0.057
	14.33	2.08					
親役割の受け入れ	23.66	2.96	0.695	0.407	-1.550	95	0.124
	26.33	2.08					
親としての自制	11.77	1.87	0.636	0.427	-2.011	95	0.047*
	14.00	2.65					
豊かな方略	12.26	1.88	0.113	0.737	-1.894	95	0.061
	14.33	1.53					
現実的な調整	5.89	1.08	0.069	0.793	-1.746	95	0.084
	7.00	1.00					
ゆとりの確保	8.45	1.60	0.756	0.387	-0.932	95	0.354
	9.33	2.31					
親としての自立	9.13	1.50	0.000	0.995	-1.366	95	0.175
	10.33	1.53					

*５％水準で有意

表５　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと健康状態との関連
上段：健康である（n＝92）、下段：どちらともいえない、健康ではない（n＝５）

	平均値	標準偏差	F値	有意確率	t値	df	有意確率（両側）
Mastery	116.74	14.11	1.413	0.238	1.897	95	0.061
	104.60	8.93					
生活と育児の調和	14.46	2.45	0.039	0.844	1.123	95	0.264
	13.20	2.05					
自分らしさの変容	18.33	2.93	1.819	0.181	1.605	95	0.112
	16.20	1.64					
育児スキルの向上	12.07	2.18	3.167	0.078	0.475	95	0.636
	11.60	0.55					
親役割の受け入れ	23.85	2.95	0.055	0.815	1.515	95	0.133
	21.80	2.77					
親としての自制	11.91	1.91	0.009	0.924	1.730	95	0.087
	10.40	1.82					
豊かな方略	12.40	1.88	0.228	0.634	1.864	95	0.065
	10.80	1.64					
現実的な調整	6.00	1.07	0.448	0.505	2.897	95	0.005**
	4.60	0.55					
ゆとりの確保	8.52	1.61	0.262	0.610	1.242	95	0.217
	7.60	1.82					
親としての自立	9.21	1.52	0.325	0.570	1.164	95	0.247
	8.40	1.14					

** １％ 水準で有意

表６　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと子どもの人数との関連
a：１人（n＝65）、b：２人（n＝27）、c：３人以上（n＝５）

		平均値	標準偏差	Levene統計量 df（2,94）	有意確率	F値 df(2,94)	有意確率	Tukey法（有意確率）
Mastery	a	117.46	13.95	1.548	0.218	2.787	0.067	
	b	115.41	14.52					
	c	102.40	5.86					
生活と育児の調和	a	14.62	2.40	0.759	0.471	3.249	0.043*	a > c（0.033*）
	b	14.33	2.47					
	c	11.80	1.30					
自分らしさの変容	a	18.49	3.00	1.113	0.333	0.907	0.407	
	b	17.70	2.81					
	c	17.40	2.07					
育児スキルの向上	a	12.20	2.06	0.501	0.607	0.549	0.580	
	b	11.70	2.40					
	c	11.80	1.48					
親役割の受け入れ	a	24.03	2.73	0.370	0.692	5.715	0.005**	a > c（0.003**）
	b	23.81	2.84					
	c	19.60	3.97					
親としての自制	a	12.06	1.84	0.812	0.447	5.651	0.005**	a > c（0.003**）
	b	11.78	1.91					
	c	9.20	1.10					
豊かな方略	a	12.42	1.93	0.122	0.886	1.724	0.184	
	b	12.37	1.76					
	c	10.80	1.92					
現実的な調整	a	5.91	1.00	1.923	0.152	2.436	0.093	
	b	6.15	1.20					
	c	5.00	1.41					
ゆとりの確保	a	8.48	1.69	1.065	0.349	0.080	0.923	
	b	8.52	1.58					
	c	8.20	1.10					
親としての自立	a	9.26	1.43	0.514	0.600	0.573	0.566	
	b	9.04	1.68					
	c	8.60	1.82					

* ５％水準で有意　** １％水準で有意

工栄養の平均点が最も高く、一番低いのが母乳栄養であった。【親としての自立】では人工栄養が母乳栄養より有意に高かった（$p=0.019^{*}$）（表８）。

⑹　離乳食

Masteryと全ての因子で、離乳食を開始しているグループの平均が高く、Mastery（$p=0.039^{*}$）と【育児スキルの向上】（$p=0.001^{**}$）で有意差があった（表９）。

⑺　子育ての主体

子育ての主体が夫妻であるグループと、妻であるグループに分けて分析した。Masteryと【ゆとりの確保】以外の項目において、夫妻グループの平均が高かった。【生活と育児の調和】（$p=0.037^{*}$）、【親としての自制】（$p=0.034^{*}$）、【豊かな方略】（$p=0.041^{*}$）、【親としての自立】（$p=0.029^{*}$）で有意差があった（表10）。

⑻　その他

就労、家族形態、乳児出生体重、乳児健康問題、家事の主体（表11）では有意差がなかった。

表７　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと乳児月齢との関連
a：１～３か月（$n=30$）、b：４～６か月（$n=28$）、c：７～11か月（$n=38$）

		平均値	標準偏差	Levene統計量 df（2,93）	有意確率	F値 df（2,243）	有意確率	Tukey法（有意確率）
Mastery	a	116.07	14.36	0.306	0.737	0.968	0.384	
	b	113.21	14.01					
	c	118.13	14.18					
生活と育児の調和	a	14.50	2.32	0.701	0.499	0.401	0.671	
	b	14.04	2.33					
	c	14.55	2.67					
自分らしさの変容	a	18.17	3.12	0.336	0.716	1.526	0.223	
	b	17.50	2.89					
	c	18.76	2.75					
育児スキルの向上	a	11.80	1.99	0.072	0.930	3.521	0.034*	b＜c（0.034*）
	b	11.39	2.39					
	c	12.71	1.90					
親役割の受け入れ	a	23.60	3.40	0.589	0.557	0.730	0.485	
	b	23.29	2.71					
	c	24.16	2.82					
親としての自制	a	11.97	1.69	0.915	0.404	0.194	0.824	
	b	11.89	2.06					
	c	11.68	2.05					
豊かな方略	a	12.53	1.80	0.399	0.672	0.685	0.507	
	b	11.96	1.73					
	c	12.37	2.10					
現実的な調整	a	5.77	1.17	0.148	0.863	1.404	0.251	
	b	5.79	0.99					
	c	6.16	1.10					
ゆとりの確保	a	8.40	1.67	1.301	0.277	0.084	0.919	
	b	8.43	1.40					
	c	8.55	1.78					
第９因子：親としての自立	a	9.33	1.54	0.643	0.528	0.521	0.596	
	b	8.93	1.39					
	c	9.18	1.61					

*５％水準で有意　　**１％水準で有意

表８　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと母乳・人工・混合栄養との関連

a：母乳栄養、または母乳栄養と離乳食（$n=56$）、b：人工栄養、または人工栄養と離乳食（$n=14$）、c：混合栄養または、混合栄養と離乳食（$n=26$）

		平均値	標準偏差	Levene統計量 df（2,93）	有意確率	F値 df（2,243）	有意確率	Tukey法（有意確率）
Mastery	a	114.36	13.667	0.235	0.791	1.949	0.148	
	b	122.57	15.291					
	c	116.77	14.120					
生活と育児の調和	a	14.04	2.551	1.652	0.197	0.189	0.189	
	b	15.29	2.785					
	c	14.65	1.917					
自分らしさの変容	a	17.91	2.887	0.320	0.727	0.278	0.278	
	b	19.29	2.463					
	c	18.38	3.151					
育児スキルの向上	a	11.80	2.203	0.005	0.995	0.253	0.253	
	b	12.86	1.875					
	c	12.12	2.085					
親役割の受け入れ	a	23.50	2.486	1.620	0.203	0.143	0.143	
	b	25.21	3.093					
	c	23.58	3.668					
親としての自制	a	11.66	1.802	2.032	0.137	0.555	0.555	
	b	11.93	2.674					
	c	12.15	1.782					
豊かな方略	a	12.21	1.765	1.045	0.356	0.675	0.675	
	b	12.71	2.199					
	c	12.38	2.061					
現実的な調整	a	6.02	0.963	3.464	0.035*	0.102	0.102	
	b	6.29	1.437					
	c	5.58	1.102					
ゆとりの確保	a	8.29	1.498	1.910	0.154	0.340	0.340	
	b	8.86	2.107					
	c	8.73	1.589					
親としての自立	a	8.93	1.463	0.725	0.487	0.026	0.026*	a < b（0.019*）
	b	10.14	1.562					
	c	9.19	1.443					

*５％水準で有意　　注）【現実的な調整】のＦ値はwelchの検定により求めた。

表９　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと離乳食との関連
上段：離乳食開始（$n=38$）、下段：離乳食未開始（$n=59$）

	平均値	標準偏差	F値	有意確率	t値	df	有意確率（両側）
Mastery	119.79	14.78	1.354	0.248	2.093	95	0.039*
	113.75	13.27					
生活と育児の調和	14.82	2.56	0.199	0.656	1.381	95	0.171
	14.12	2.34					
自分らしさの変容	18.76	2.74	0.031	0.861	1.495	95	0.138
	17.86	2.99					
育児スキルの向上	12.92	1.89	0.000	0.996	3.452	95	0.001**
	11.47	2.09					
親役割の受け入れ	24.34	2.82	0.002	0.964	1.614	95	0.110
	23.36	3.01					
親としての自制	11.95	2.09	0.488	0.487	0.460	95	0.647
	11.76	1.82					
豊かな方略	12.68	1.97	0.527	0.469	1.531	95	0.129
	12.08	1.82					
現実的な調整	6.11	1.09	0.069	0.794	1.289	95	0.201
	5.81	1.09					
ゆとりの確保	8.68	1.66	0.349	0.556	1.024	95	0.308
	8.34	1.59					
親としての自立	9.53	1.54	1.238	0.269	1.916	95	0.058
	8.93	1.46					

*５％水準で有意　　**１％水準で有意

表10　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと子育ての主体との関連
上段：夫妻（$n=5$）、下段：妻（$n=92$）

	平均値	標準偏差	F値	有意確率	t値	df	有意確率（両側）
Mastery	128.00	16.58	0.860	0.356	1.961	95	0.053
	115.47	13.79					
生活と育児の調和	16.60	2.30	0.004	0.951	2.116	95	0.037*
	14.27	2.40					
自分らしさの変容	19.80	2.95	0.155	0.694	1.253	95	0.213
	18.13	2.90					
育児スキルの向上	13.40	1.95	0.034	0.854	1.477	95	0.143
	11.97	2.12					
親役割の受け入れ	25.40	2.97	0.005	0.942	1.289	95	0.200
	23.65	2.95					
親としての自制	13.60	2.19	0.744	0.391	2.145	95	0.034*
	11.74	1.87					
豊かな方略	14.00	1.87	0.182	0.670	2.069	95	0.041*
	12.23	1.86					
現実的な調整	6.40	1.14	0.078	0.780	0.993	95	0.323
	5.90	1.09					
ゆとりの確保	8.20	2.05	0.085	0.771	−0.387	95	0.700
	8.49	1.61					
親としての自立	10.60	1.52	0.203	0.653	2.224	95	0.029*
	9.09	1.48					

*５％水準で有意

表11　乳児期の子どもを育てる親のMasteryと家事の主体との関連
上段：夫妻（$n=17$）、下段：妻（$n=77$）

	平均値	標準偏差	F値	有意確率	t値	df	有意確率（両側）
Mastery	115.59	14.24	0.146	0.703	0.049	92	0.961
	115.77	13.57					
生活と育児の調和	14.18	2.63	1.070	0.304	0.356	92	0.723
	14.40	2.31					
自分らしさの変容	18.06	2.82	0.193	0.661	0.163	92	0.871
	18.18	2.81					
育児スキルの向上	12.65	1.87	0.026	0.871	1.394	92	0.167
	11.86	2.16					
親役割の受け入れ	23.24	3.85	1.650	0.202	0.704	92	0.483
	23.79	2.73					
親としての自制	11.71	2.17	1.296	0.258	0.170	92	0.866
	11.79	1.84					
豊かな方略	12.18	1.91	0.010	0.921	0.250	92	0.803
	12.30	1.81					
現実的な調整	5.76	1.20	0.521	0.472	0.629	92	0.531
	5.95	1.06					
ゆとりの確保	8.24	1.48	0.748	0.389	0.524	92	0.601
	8.45	1.58					
親としての自立	9.59	1.33	0.031	0.861	1.373	92	0.173
	9.04	1.53					

Ⅵ．考　　察

１．対象者の特性

日本における平成29年出生順位別の出生数の割合は、第１子46.4％、第２子36.9％、第３子以上16.7％である（厚生労働省，2017）。今回の研究対象者は子どもの人数１人が65名（67.0％）、２人が27名（27.8％）、３人以上が５名（5.2％）であり、第１子の乳児を育てる親の割合が高いといえる。

2018年の男性における全国の25歳～54歳までの就業率は91.7％～94％である（厚労省，2019）。今回の研究対象者の父親の就業率は94.8％であり平均的であるといえる。父親の就労形態はフルタイムのみであり、２名（2.1％）がフルタイム育児休業中と回答していたが、全国の育児休業取得率5.14％（厚労省，2018）と比較すると低い値であった。

以上から、研究対象者の特徴として初めて子育てをする親が多く、ほとんどの父親がフルタイムで就業しており、ごくわずかながら育児休業を取得している父親もいた。

２．乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと関連する要因

１）乳児期の子どもを育てる父親のMastery

乳児期の子どもを育てる父親のMastery総得点の平均値は116.11（SD14.12）、獲得率は76.39％であった。作成した質問紙の尺度は１項目につき、４段階４点満点としており、４点：非常にそうである、３点：ややそうである、という回答から、３点以上でMasteryに至っていると考えた。Mastery総得点から算出した１項目あたりの平均が３点以上であることから、今回の研究対象者は概ねMasteryに至っていると考えられた。

２）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと職業の有無

職業有り（フルタイム、フルタイムで育休中）、職業無しとの比較において、Mastery総得点、【親としての自制】で有意差がみられ、どちらも職業無しの平均値が高かった。職業をもたず、子育てに専念できる状況にある父親がMasteryを高めていることは想像に難くない。しかし今回の研究対象者のほとんどが職業をもつ父親であり、仕事と子育てをどのように自らの役割として統

合しMasteryを促進するか、具体的な方策が求められる。

3）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと健康状態

「健康である」と回答した者とそうでない者との比較では、【現実的な調整】で有意差があり、「健康である」と回答した者はMastery総得点と全ての構成要素で平均値が高かった。高木ら（2021）は乳幼児から中学生の子どもをもつ父親を対象として心身の健康度を「身体機能」「体の痛み」「全体的健康感」など8つの下位尺度からなるSF8で測定し、関連要因を検討した結果、健康度が低いと「仕事の困難感」「生活の余裕のなさ」を感じていることを明らかにしている。健康でないと感じている者は、仕事の困難や生活の余裕のなさを抱え、子育てにも少なからず影響を及ぼすと考えられる。本研究では対象者に「健康である」「不健康」「どちらでもない」の回答により比較した分析であるため、今後はMasteryがどのような健康状態と関連があるか、より詳細な分析が必要である。

4）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと乳児側の要因

乳児月齢の3群比較と、離乳食開始・未開始との比較において【育児スキルの向上】に有意差がみられた。

【育児スキルの向上】は「子どもへの対応がうまくいくようになった」、「子どもが泣いたときに、何をしてほしいかがある程度わかるようになった」等、「うまくいく」、「わかるようになった」、「できるようになった」という表現が含まれた質問項目から構成されている。つまり【育児スキルの向上】は単に知識・情報や技術を理解することではなく、子どもの反応にあわせて、知識・技術を応用するスキルを習得し、効果をもたらしている状態である。

この【育児スキルの向上】において4～6か月群の父親の平均点が最も低かった。乳児は4か月で睡眠リズムが確立する一方、夜泣きが始まる時期でもあり、6か月にかけてその割合が増えている（篠原，2009）。日中は仕事をしている父親でも、子どもの夜泣きがあると、その対応に戸惑いを感じたり、子どもへの対応が「うまくいかない」と感じやすいのではないか。運動発達では5～7か月頃には寝返りができるようになるが、この寝返りは乳児にとって最初の移動運動となり（発達心理学会，2013）、親にとっては乳児が知らない間に移動することで予測しなかったことが生じ安全上の気がかりも増え、対応に苦慮することも増えると考えられる。これらにより4～6か月群の父親の【育児スキルの向上】得点が低くなったと推測される。

一方、7～11か月群の父親は【育児スキルの向上】得点が最も高く4～6か月群と有意差があった。生後9～12か月では三項関係が成立し、乳児が他者の行為の背景にある意図や動機があることに気づくようになり、また自分の意図を表現し伝えようとする（岡本ら，2004）。つまり、それまでの月齢と比較し、親が乳児と意図を共有するコミュニケーションがとれるようになるといえる。これが「子どものことがわかる」という感覚をもたらし、7～11か月の父親の【育児スキルの向上】得点を高くしたと考えられる。

離乳食開始群では、未開始群よりも【育児スキルの向上】得点が有意に高かった。乳児が離乳食を開始した場合、父親と子どもが食事をともにする場面や、食事の世話を父親が行う場面も増えると考えられる。毎日の食生活が繰り返される中で、父親と子どもが接する機会が増えることにより「子どものことがわかる」感覚をもたらし【育児スキルの向上】得点を高くしたと考えられる。

乳児の栄養法では【親としての自立】において人工栄養が母乳栄養より有意に高かった。【親としての自立】は「周囲からの支援を受けながら、親としての役割をとれるようになった」、「忙しい中でも充実感をもって、親としての役割を十分とれるようになった」などの質問項目からなり、乳児期の子どもを育てる親が、周囲の支援を受けながら、あるいは大変な状況でも自分が決定、行動し、親としての課題に主体的に関与することである。

妊娠期から生後4か月までの父親と母親のsensitivityの発達に関する研究（小山ら，2014）では、授乳や着替えを実施している父親のsensitivity得点が上昇したことが明らかにしてい

る。Sensitivityは「ポジティブな感情」、「明確な理解と適切な反応」、「親子のやりとりの間のタイミングの気づき」などの構成要素からなっており、小山ら（2014）は授乳が「目を合わせたり話しかけるなどの刺激によって、子どもが微笑み、それによって父親も愛情を深める」こと、「父親にとって授乳を実施することは親であることを実感できる貴重な時間」となっていると考察している。また小山らは着替えについて、月齢の若い乳児の消化管機能の未熟性による嘔吐などから、授乳の回数に伴って着替えも増えていると考察している。本研究でも【親としての自立】において人工栄養群の父親が有意に高い得点であったことは、母乳栄養や混合栄養群とくらべると、父親が授乳する機会が増え、その育児行動をとった場合、授乳前後で子どものニーズを判断したり、「ミルクを与える」、「衣服が汚れたら着替える」など子どもにとって適切な行動を選択して実施し、その結果、子どもの反応が変化することによって、自分が親役割をとることができているという実感を得られる可能性があると考えられた。

5）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと子どもの人数

子どもの人数で比較したところ、【生活と育児の調和】、【親役割の受け入れ】、【親としての自制】において、いずれも子ども１人より、３人以上で有意に低かった。

【生活と育児の調和】は親が目の前の課題に効果的に対処し育児と生活を調和させていくこと、【親役割の受け入れ】は親としての役割を自分のこととしてとらえ、おかれた状況に肯定的な意味付けや楽観的感情が生じる状態であり、親としての成長・発達につながること、【親としての自制】は親が自分を制し、自分に生じる感情や子どもがおかれた状況に向き合い理解することで対処を見出し、育児のストレスを克服することである。

３歳児をもつ父母を対象とした研究では、第１子より第２子、第２子より第３子の父親の親役割達成感が高く、父親が子どもの相手や世話の経験を長く積み、親役割の自覚がより深まったことが親役割達成感の高さにつながっていると考察している（中村, 2016）。一方、松田（2016）は父親の育児参加度を「世話」と「遊び」とし、それぞれに影響する変数をみている。その結果、末子年齢が高くなるほど世話及び遊びの頻度は少ない、子ども数が多いほど世話や遊びの頻度は少なかった。また寺園（2010）の研究では父親の親役割達成感には子どもの出生順位との違いはないと報告している。Ferketichら（1995）は出産後早期から８か月まで子ども１人の父親と、子ども２人以上の父親を対象に追跡調査を行っている。その研究結果では、どの時期においても父親役割能力得点が高いのは２人以上の父親であったが、有意差はなかった。

本研究では、子どもの人数が増えるほどMasteryは低い結果となっており、既存の研究結果から子どもの人数と親としてのMasteryがどのように関連しているか明確に説明することができないが、子どもの人数が多いことにより父親の時間的・心理的余裕の少なさが影響していることが推測される。柏木（2011）は「親が子どもに向き合う際に重要なのは応答性、多様性、柔軟性」であり、それは「育てるものの側に心理的余裕がないとできない」と述べている。本研究の対象者は約97％が職業をもつ父親であり、子どもの人数が増えるほど子どもにじっくりと向き合うゆとりがなく、【生活と育児の調和】、【親役割の受け入れ】、【親としての自制】が低くなったことも一因として考えられる。

6）乳児期の子どもを育てる父親のMasteryと責任をもった子育てへの関与

子育ての主体を夫妻と、妻に分けて分析したところ、【生活と育児の調和】、【親としての自制】、【豊かな方略】、【親としての自立】で有意差があった。

柏木（2003）は父親が子どもの主たる養育者となっている「１次的世話役」、母親が主たる養育者で父親が「２次的世話役」となっている２者を比較した研究において「１次的世話役」の父親では１次的世話役の母親の行動と近い特徴を示したという結果を紹介し、「子どもへの適切な行動は養育に直接１次的責任を負う経験のなかで育まれる」と述べている。本研究でも子育ての主体が「夫妻」と答えた父親では、子育て

の責任を母親と同等に負っている自覚があると考えられ、その結果、複数の構成要素で他の父親より有意に高い結果となったのではないか。

柏木（1993）は乳児との付き合いを迫られる中で、親には子どもや、他者への共感的態度が育つこと、父親も母親と同様に育児に関与することで親としての発達がみられ、そればかりか、我が子や妻への態度を変え、さらに我が子に限らず広く子どもへの関心、幼いものを慈しむ心につながり、その人格や社会的態度にまで及ぶと説明している。このことは、父親が子育てに責任をもって関わることにより、母親への共感的態度が培われ、子どもへの関心をより高め、子育ての工夫や努力を可能にしていくのではないか。本研究では家事の主体についても分析したが、そこでは「夫妻」と回答した群でMasteryが有意に高いものはなかった。

これらから父親が子どもと直接かかわる「子育て」に責任をもって関与することがMasteryには重要であることを示唆している。これまで日本の男性は家庭での経済的基盤を担う働き手としての役割を求められており、国際比較でみた父親の子育て分担が最下位であると報告されている（牧野ら，2010）。本研究でも育児休業をとっている父親はわずかであり、父親が職業的達成と子育ての責任を遂行することは簡単なことではない。しかし、父親が子育てに責任をもって関与することは父親が人として成長発達していくための重要な課題であり、そのための具体的な方法を明らかにしていく必要がある。

3．看護への示唆

本研究結果から、乳児期の子どもを育てる父親のMasteryは職業の有無、健康状態、子どもの月齢や離乳食の開始、栄養方法が関連していた。まず、職業や健康状態を含め、父親がおかれている社会的役割や日常生活状況などから子育てに影響する要因はないか査定していくことが必要である。そして、父親には乳児期の子どもの月齢による発達の特徴や栄養方法に関する知識や技術を提供していくことでMasteryが促進されると考えられる。しかし、子どもの人数が増えるとMasteryは低くなることから、子どもの世話などの経験を多くするだけでは一時的な成果でしかなく、何より重要なのは、父親が母親とともに育児の主たる責任者であるという自覚をもち、子育てに関与することであると考えられる。多くの父親が仕事をもち時間的な制約がある中でどのように子育てに責任をもって関与していくか、夫婦で一緒に考え行動に移せるような支援を行うことが必要である。

Ⅶ．研究の限界

本研究は、ある地域に限定された乳児期の子どもを育てる親を対象としており、平均的な母集団とは異なる可能性がある。また対象者数が少なく、分析結果に影響している可能性は否定できない。今回、父親が実際に行っている育児行動やその時間などの詳細なデータは得ておらず、構成要素間の関係性などの分析も明らかになっていないことが限界である。

Ⅷ．結　　論

1．乳児期の子どもを育てる親のMastery総得点平均値、獲得率から、本研究の対象者である父親は概ねMasteryに至っていると考えられた。
2．乳児期の子どもを育てる父親のMasteryは職業、健康状態、子どもの人数、月齢、栄養、離乳食開始、子育ての主体が関連していた。
3．乳児の発達の特徴や栄養方法によって【育児スキルの向上】、【親としての自立】が高められていると推測された。
4．子どもの人数が増えることにより、父親の時間的・心理的ゆとりのなさが一因となり、【生活と育児の調和】、【親役割の受け入れ】、【親としての自制】を低下させていると推測された。
5．父親が仕事を持ちながらも母親とともに子育てに責任をもって関与することがMasteryを高めるには重要であることが分かった。

謝　辞

本研究の主旨を理解してくださり、ご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝いたします。本研究は高知県立大学看護学研究科博士後

期課程における博士論文の一部を修正加筆したものである。なお、本研究は文部科学省科学研究費（基盤研究Ｃ：課題番号21K10921）の助成を受けて行った。

本研究に申告すべき利益相反事項はない。

引用・参考文献

Ferketich, S.L., Mercer, R.T.（1995）. Predictors of role competence for experienced and inexperienced Fathers. Nursing Research, 44(2), 89-95.

神谷哲司（2008）.「育児する親」とジェンダー 父親と母親は違うのか？柏木惠子，高橋惠子編．日本の男性の心理学 もう１つのジェンダー問題，185-190．東京：有斐閣.

柏木恵子，若松素子（1994）.「親となる」ことによる人格発達，発達心理学研究，5(1)，72-83.

柏木恵子（2011）．父親になる，父親をする 家族心理学の視点から．岩波ブックレット．東京：岩波書店.

柏木恵子（2003）．家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点．東京：東京大学出版会.

柏木恵子（1993）．父親の発達心理学 父性の現在とその周辺．東京：川島書店.

厚生労働省（2021）．育児・介護休業法の改正について：https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000851662.pdf（R4. 3. 15アクセス）

厚生労働省（2019）．労働力調査（基本集計）平成30年（2018年）平均結果の要約：https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index1.pdf（R4. 3. 15アクセス）

厚生労働省（2018）.「平成29年度雇用均等基本調査」の結果概要 https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-29r/07.pdf（R4. 3. 15アクセス）

小山里織，森山雅子，小林佐知子，他（2014）．父親と母親のsensitivityの発達と育児行動の関連―妊娠期から生後４か月までの縦断的研究―．小児保健研究，73(5)，680-688.

松田茂樹（2016）．父親の育児参加の変容．稲葉昭英，保田時男，田渕六郎，他編．日本の家族1999-2009全国家族調査［NFRJ］による計量社会学，147-162．東京：東京大学出版会.

日本発達心理学会 編（2013）．発達心理学事典，東京：丸善出版.

中村瑛一，有本梓，田髙悦子，他（2016）．３歳児をもつ父親と母親における親役割達成感の関連要因．日本地域看護学会誌，19(1)，4-13.

岡本依子，菅野幸恵，塚田-城みちる（2004）．エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学 関係の中で育つ子どもたち．東京：新曜社.

嶋岡暢希，中野綾美，野嶋佐由美（2020）．乳児期の子どもを育てる親のMastery―構成要素と関連要因の探索―高知女子大学看護学会誌，46(1)，15-30.

篠原ひとみ，兒玉英也，吉田倫子，他（2009）．乳児期の夜泣きに関する実態―有効な看護介入の基本情報として―母性衛生，49(4)，499-506.

高木悦子，小崎恭弘（2021）．育児に積極的に関わる父親の心身の健康度に関連する要因．母性衛生，62(2)，301-308.

寺園さおり（2010）．子育てによる親役割達成感と親の心理的な発達との関連．小児保健研究，69(1)，47-52.

Younger, J.（1991）. A theory of mastery. Advances in Nursing Science, 14, 76-89.